

継承日本語話者⁽¹⁾である大学生の読解プロセスに関する調査 —発話思考法を用いたパイロットスタディー—

金山 泰子 国際基督教大学
藤本 恭子 国際基督教大学

[キーワード]

継承日本語話者 読解ストラテジー 読解プロセス 発話思考法

1 はじめに

本稿では、継承日本語話者である大学生が、読解プロセスにおいてどのようなストラテジーを用いて読解に臨んでいるのか、その一端を探るために、発話思考法を用いて行った調査について報告する。

筆者らはこれまで継承日本語話者である大学生の読解教育に携わる中で、彼らが精読のレベルではどの程度正確に理解できているのか、また、わからない部分をどのようなストラテジーを用いて補っているか等について測りかねており、彼らの読解プロセスを可視化して観察することが課題であった。そこで今回はパイロットスタディーとして、3名の継承日本語話者の協力を得て、発話思考法を用いた調査を実施した。また日本語母語話者⁽²⁾との比較において、どのようなストラテジーの違いが見られるかを観察するために、継承日本語話者と日本語母語話者の両方に同じ方法で調査を試みた。

以下では、先行研究、調査の概要、結果、考察を述べ、最後に今後の課題をまとめる。

2 先行研究

大学における継承日本語教育については、実践報告は散見するものの(澁川・武田 2017、金山・藤本 2017)、学生らの実態については明らかにされていないのが現状である。金山・藤本(2017)は読解教育の実践を踏まえて、継承日本語話者である大学生の読みの特徴として「正確に理解できていなくても、一つの点に注目して想像力を働かせたり意見を述べたり、批判したり、議論したりすることは得意」(p.51)である一方、精読には意欲的でなく、指示語や語彙についての質問に曖昧にしか答えられないことに言及している。こうした現状にあって、明確に可視化しにくい学生らの読解プロセスを観察することが課題であった。

一方、第二言語学習者の読解プロセスの研究としては、発話思考法を利用した研究調査に、Block(1986)、森(2000)、館岡(2005)、和氣(2013)などがある。

Block(1986)は、大学の読書矯正クラス(remedial reading courses)を履修している英語母語話者と、第二言語としての英語学習者を対象に、発話思考法を用いて読解ストラテジーを調査している。Blockは読みのアプローチとして reflexive mode と extensive mode の二つがあるとしている。reflexive mode は、個人的、感情的で、テキスト内の情報よりもテキストから離れ自分自身に関連付けた反応を示す読み方である。

一方、extensive mode は、自分自身に関連付けるといよりも、テキストの筆者の意図に対して客観的に反応する読み方である。分析の結果、読み手には integrators と nonintegrators という2つのタイプがあるとしている (p.471)。integrators は、extensive mode を使用し、テキスト内の情報を統合し、文構造を意識し、自分の読みをモニターするタイプの読者であり、nonintegrators はテキストから離れた個人的経験利用し、reflexive mode を多用し、テキスト内の情報を統合しようとはしない (p.482-483)。

一方日本語学習者を対象とした調査では、森 (2000) が日本語母語話者1名と、レベルの異なる日本語学習者2名の読解プロセスを観察している。その結果、母語話者には、言葉や表現そのものに対する反応が見られる、テキストのスタイルに対するコメントが見られる、読解中に自己の個人的記憶を想起している、筆者に対する社会的・感情的次元が強く作用している、などの読解ストラテジーが見られるとしている。一方、日本語学習者の読みは、狭い意味でのテキストの世界に限られていると観察している。館岡 (2005) は、中上級レベルの学習者を対象に調査を行い、読み手は仮説を設定し、検証しながら読んでいくこと、優れた読み手は既有知識を多用していること、前後の情報や文脈を統合することにより解決しようとする「グローバルな自問」(p.78)を頻繁に行っていると指摘している。また和氣 (2013) は、学習者が読解過程のどこで躓くかを観察している。

これらの研究は、第二言語としての日本語学習者、英語学習者を対象としたものであり、上記のような結果が、継承日本語話者にも適用できるかどうかは明らかではない。そこで本調査では、少数の被験者を対象としたパイロットスタディーとして、先行研究を参考に発話思考法を用いた調査を試みる。

3 調査の概要

3-1 調査対象

本調査は、日本国内の大学に通う1名の日本語母語話者(以下M1)と3名の継承日本語話者(以下H1、H2、H3)を対象に実施した。被験者らの背景は以下の通りである。

- ・被験者 M1：日本語母語話者。男子。
- ・被験者 H1：継承日本語話者。女子。小学校5年生から高校2年生までアメリカの現地校で教育を受ける。両親は共に日本人で、家庭では日本語で会話。現地の塾で国語の大学受験参考書を取り寄せてもらい勉強した。大学では継承日本語教育コースは履修していない。
- ・被験者 H2：継承日本語話者。女子。オーストラリアで生まれ高校まで現地校で教育を受ける。母は日本人、父は中国系オーストラリア人で、家庭では母親とは日本語、父親と兄弟とは英語で会話。オーストラリアの大学で1年学んだ後、日本の大学に進学。大学初年時に筆者らが担当した継承日本語教育コースを1年履修した。
- ・被験者 H3：継承日本語話者。女子。日本で生まれ、2ヶ月のときにハワイへ移住し、10歳までハワイの現地校で教育を受ける。小学校5年で日本に戻り、高3まで国内のインターナショナルスクールに通う。母親は日本人、父親は日系アメリカ人で、

家では母親とは日本語、父親とは英語で会話。筆者らが担当した大学初年時に継承日本語育コースを1年履修した。

3-2 調査方法

本調査は、2019年10月～11月に2回にわたって実施した。被験者には、継承日本語話者の読解プロセスを調査するための目的であることを説明し、理解を得た上で実施した。また上述したように、被験者H2とH3は筆者らが担当した継承日本語教育コースを履修していたが、調査時にはコースを修了してから2年以上が経過している。

1回目の調査では、調査開始前に発話思考法のウォーミングアップとして練習課題を提示し、調査者が被験者の前で実施して見せた。被験者にも実際練習課題に沿って話す練習をしてもらった。調査に要する時間は1時間弱程度で、以下の手順で実施した。

- ①用意された読み物を音読する。読めない字があっても続けるように指示した。
- ②内容理解のために黙読する。最長15分程度を目安とした。
- ③内容をまとめ、質問に答える。具体的な質問内容については本稿末に示した(資料1)。
- ④読み物の一部を音読し、考えたことを口頭で話す(発話思考法)。
- ⑤意見を述べる。

2回目は、1回目実施後の1か月以内に、30分ほどのフォローアップインタビューを行った。調査過程の音声は全て録音し、文字化した。本調査では、精読のプロセスを観察するために黙読して理解するための時間をあらかじめ設けた上で、その読解プロセスを可能な限り可視化するための方法として、読み物の一部について発話思考法による調査を実施した。課題のテキスト全文ではなく一部を発話思考法の対象としたのは、被験者の時間的・心理的負担を少なくするためである。

3-3 テキスト

テキストは「普段着のファミリー」(阿久 悠『文藝春秋』2003年12月号臨時増刊号所収)の一部である。本稿末に調査に使用した部分の全文を示した(資料2)。本テキストを課題として選択するにあたっては、筆者らが担当した継承日本語教育コースの最終学期で読解教材として使用するテキストの内容やレベルと同程度の物を想定した。上記コースでは、最終学期の読解課題の一つとして、新書を一冊読んで報告するというブックレポートが課されている。したがって、コース修了後には、辞書を使いながら自力で新書を読める程度の読解力を有していることが期待されている。上記を踏まえて、具体的には以下の点に留意して調査テキストを選んだ。

- ①『大学入試全レベル問題集 現代文』(旺文社)の6レベルの中から、大学入試レベルではあるが難易度が高すぎないということに留意して「①基礎レベル」から選んだ。
- ②『文藝春秋』所収のエッセイであり、成人の一般読者を対象としている。

- ③長すぎず内容が完結している。
- ④テキスト理解のために、文化的な要素、背景が必要である。
- ⑤エッセイというジャンルであることから、筆者の意見が表現されており、書き手の意図を正確に読み取れているかを確認することができると考えた。

発話思考法の対象としたのは、以下の部分である。この部分を選んだ理由は、文章全体の主旨となることが書かれており、適当な長さにとまっていること、また、キーワードとして、「マイカー」「サンダル履き」といった具体性を持った語彙と、「自由」「精神性」といった抽象語彙がバランスよく使われていることである。

表 1 発話思考法に用いたテキスト

①普段着の過信は、たぶん、マイカーを持つようになってからのことだと思う。②人々は普段着で移動するようになった。③自分の家の門前から、サンダル履きのまま東京都心へ直入出来る。④楽で、便利であろうが、不作法のまま家族が移動し、不作法のまま他人の社会を踏むかと思うと、実に空恐ろしい感じがするのである。⑤ファミリーはしっかりと不作法の同志となり、自由を満喫する。⑥満喫する方はいいだろうが、される方はたまったものではない。⑦ここでいう「自由」とは、他人の自由を奪う自由という意味で、戦後日本人が実践した自由とはこれだけである。⑧他人の自由を奪う自由、これが普段着の精神性にとりついて、傍若無人の自由として蹂躪するのである。(302字)

*ルビは原文のままである。○数字は、文の番号を示すために付したが、原文には含まれない。

3-4 分析方法

本調査では、発話思考法で得たプロトコル・データを主な分析の対象とした。その他、内容質問、フォローアップインタビューから得られた音声データを補助的に利用した。

発話思考法を用いて得た音声文字化されたプロトコル・データは、ストラテジーの種類の変わり目で分割した。ストラテジーの項目は、Block(1986)を使用した。ストラテジーの項目については、森(2000)、和氣(2013)らはBlock(1986)を元に簡素化したコーディングを用いている。今回の調査は筆者らにとって初めての調査であり、第2言語学習者と同じでよいのかという検証もされていないため、まずは項目数の細かいBlock(1986)をそのまま適用することとした。

ストラテジーの分類を決定するにあたっては、次の手順で行った。

- ①まず調査者2名で、対象者1名のプロトコルを観察し、分類作業を行った。ストラテジーの切れ目や、どのような発話がどの項目に当てはまるかを確認した。
- ②調査者が個別にデータ分析を行った。
- ③それぞれの分析結果を持ち寄り、ストラテジー分類について意見の相違がある場合は、データを見直し、協議によって決定した。

表2にBlockの用いた15の分類項目とプロトコル例を示す。プロトコル例については、

本調査で得られたプロトコル例から抜粋して示すこととする。該当するプロトコル例がなかった項目については、例を示していない。

表2 ストラテジーの分類とプロトコル例

<p><u>General Strategy</u></p> <ol style="list-style-type: none">1. Anticipate content: テキストの内容を予測する。2. Recognize text structure: テキスト全体におけるその文の機能（要点、例など）を分析して、テキストの構成を把握しようとする。3. Integrate information: 前に出てきたことと関連付ける。 例) 「普段着の過信は前の段落で書いてある…」4. Question information in the text: 内容についての疑問 例) 「この家族にとってはプラスのことなんだろうか」5. Interpret the text: テキストの解釈、仮説、推論 例) 「他人の社会を踏む。だから自分の家じゃないんだよ、みたいな。」6. Use general knowledge and associations: 自分の知識や経験を使って文の内容を説明、評価、またテキストの内容に反応する。 例) 「私はあんま人の格好気にしないっていうか、ま、でも状況によりますけどね」7. Comment on behavior or process: 自己の読み行動についてのコメント8. Monitor comprehension: 自己の理解度についてのコメント9. Correct behavior: 自己の読みの修正10. React to the text: 読み手の反応、意見 例) 「恐ろしいっていうの、ちょっと大げさかなって思うんですけど」 <p><u>Local Strategy</u></p> <ol style="list-style-type: none">11. Paraphrase : 違う言葉で言い換える 例) 「『普段着の過信』っていうのは、何か思いすぎっていうのか」12. Reread: 文を読み直す 例) 「社会を踏む、うーん、社会を踏む」13. Question meaning of a clause or sentence: 文や節がわからない 例) 「この文の意味がわからない」14. Question meaning of a word: 単語がわからない 例) 「この言葉の意味がわからない」15. Solve Vocabulary problem: 文脈、類義語などから語彙を理解しようとする。 例) 「『蹂躪』には『足』が入っているから、踏み入る感じ」
--

4 結果

4-1 テキストの理解度

テキストを音読、黙読した後に、内容の要約、筆者の意見、内容についての質問を行ったところ、まとめ方や表現の仕方に違いは見られたものの、被験者はいずれもテキストの大意がとれており、筆者の主張も正しく内容もとらえられていると判断した。表3は、被験者らの漢字・語彙の既有知識についての情報である。上段が音読時に読めなかった或いは誤読した漢字の数、下段は読解質問終了後に「意味がわからなかった言葉」として被験者が回答した語彙数である。

表3 漢字・語彙の既有知識

	母語話者	継承日本語話者		
	M1	H1	H2	H3
音読時に読めなかった／誤読した漢字	0	2	11	19
意味のわからなかった語彙（自己申告）	0	1	1	7

表3が示すように、M1は音読時に読めない漢字はなく、意味のわからない語彙もなかった。一方、H1、2、3はそれぞれ違いがあるが、読めなかった漢字、意味のわからなかった語彙がいくつか見られた。表4はH1、2、3が読めなかった漢字、意味のわからなかった語彙である。

表4 H1、2、3の未知の漢字語彙

	H1	H2	H3
音読時に読めなかった／誤読した漢字	儼然 毎（ごと）	素朴 着衣 他町村 誠意 毎（ごと） 門前 不作法 空恐ろしい 傍若無人 喝采 博した	素朴* 着衣 儼然 町内 他町村 毎に 尊重 放棄 不作法 門前 空恐ろしい 奪う* 傍若無人 実践 秩序 喝采を博す 国情* 崩す 打ち砕く
意味のわからなかった語彙（自己申告）	じゅうりん 蹂躪	じゅうりん 蹂躪	不作法 傍若無人 じゅうりん 蹂躪 空恐ろしい 秩序 国情 喝采を博した

*を符したものは、最初の音読時では読めなかったが、その後の質問時やインタビュー時で読み方がわかったものである。

*表中の「蹂躪」は、本文中にもふりがなが付してある。

4-2 プロトコルのカテゴリー分類による分析

以下では、発話思考法により得られた発話プロトコルデータの量的分析について報告する。表5はストラテジーの使用頻度数を示したものである。また13～15については、語彙・文法などの既有知識に関する項目と考え、表6として分けて表示した。

表5 ストラテジーの使用頻度

	分類項目	母語話者	継承日本語話者		
		M1	H1	H2	H3
1	内容予測	0	0	0	0
2	文の機能、構成の把握	0	0	0	0
3	前文脈との関連付け	3	1	0	0
4	内容についての疑問	1	0	0	0
5	解釈・仮説・推論	11	10	8	8
6	知識・経験に基づく説明・批判、反応	4	6	6	5
7	読み行動についてのコメント	0	0	0	0
8	理解度についてのコメント	0	0	0	0
9	読みの修正	0	0	0	0
10	読み手の反応・意見	0	2	5	0
11	言い換え	5	1	1	3
12	文の読み直し	12	7	2	2
	使用頻度数合計	36	27	22	18

表6 語彙等既有知識に関する発話

	分類項目	母語話者	継承日本語話者		
		M1	H1	H2	H3
13	文や節がわからない	0	1	0	1
14	単語がわからない	0	0	1	2
15	単語の意味を類推	0	0	0	1
	合計	0	1	1	4

ストラテジーの使用頻度については、M1が36回と最も多く、H1、2、3を大きく上回っている。また「内容予測」「文の機能、構成の把握」「読み行動についてのコメント」「理解度についてのコメント」「読みの修正」のストラテジーについては、M1にもH1、2、3にも見られなかった。語彙等の既有知識に関する発話については、M1は全く現れず、

H1、2、3には何回か現れている。

表7は、上記表5項目を対象として、使用した総ストラテジーを100とした場合の割合を数字で示したものである。さらに個別に使用ストラテジーの多い3項目を比較したものが表8である。

表7 ストラテジーの使用割合（少数点第2位を四捨五入）

	分類項目	母語話者	継承日本語話者		
		M1	H1	H2	H3
3	前文脈との関連付け	8.3	3.7	0	0
4	内容についての疑問	2.8	0	0	0
5	解釈・仮説・推論	30.6	37	36.4	44.4
6	知識・経験に基づく説明・批判、反応	11.1	22.5	27.2	27.8
10	読み手の反応・意見	0	7.4	22.7	0
11	言い換え	13.9	3.7	4.5	16.7
12	文の読み直し	33.3	25.9	9.1	11.1
	合計	100	100	100	100

表8 使用ストラテジー上位3項目（少数点第2位を四捨五入）

	母語話者	継承日本語話者		
	M1	H1	H2	H3
1	文の読み直し 33.3%	解釈・仮説・推論 37%	解釈・仮説・推論 36.4%	解釈・仮説・推論 44.4%
2	解釈・仮説・推論 30.6%	文の読み直し 25.9%	知識・経験に基づく説明・批判・反応 27.2%	知識・経験に基づく説明・批判・反応 27.8%
3	言い換え 13.9%	知識・経験に基づく説明・批判・反応 22.5%	読み手の反応・意見 22.7%	言い換え 16.7%

全体として、解釈・仮説・推論のストラテジーが多く使われており、被験者全てが全体の3～4割の割合でこのストラテジーを使用している。M1とH1、2、3との比較で見ると、M1に顕著だったことは、文の読み直しが多かったことである。一方、知識・経験に基づくテキストの説明・批判、テキストに対する反応については、M1が約1割であったのに対し、H1、2、3は全て2割以上となっている。テキストの理解よりも、読み手本人の体験、知識、意見が反映される項目6と10に注目すると、M1とH1、2、3との違いが顕著である。2項目のストラテジーを合計した数字を見てみると、

M1 が使用ストラテジー全体の約 1 割であるのに対し、H1 は 29.6%、H2 は 49.9%、H3 は 27.8% となっており、使用ストラテジー中 4 分の 1 ～半分の割合で使用している。

4-3 プロトコルデータの個人別分析

以下では各被験者の事例について、発話思考法により得られた発話プロトコルを中心に検討し、インタビューで得られた情報等も交えつつ、個々の読解のプロセスについて観察する。但し、紙幅が限られているため、プロトコルの一部を示し、各被験者に特徴的と考えられる点について述べる。

4-3-1 H1 の事例

表 9 H1 のプロトコルデータ

- ①えっと、これは、う～ん、普段着の過信は前の段落で書いてある、ま、ときには、他者に合わせる事とか、社会を尊重にや人間の個性がなくなってきたことの原因が、マイカーを持つようになってから、っていうのはここ最近である、ってことかな？
- ③これは、ま、その、電車とかの話でも通用するかなあ？はは（笑）。ん～サンダル履きのまま東京都心…いや、サンダル履きで車を運転しちゃダメだから、電車とか、歩き、でも東京都心…電車なのかな。
- ④車で、普段着、ま、スウェットとかで、（笑）、車で東京都心に入って、でも、入るほう、そっか、そのまま、そうデパートとか、行くこと？なのかな。不作法のまま他人の社会を踏む、だから、ま、場所にもよりけりかなあ…う～ん…ここへ、そっか、作者は、昔と違うことを恐ろしい感じがする、と、述べているかな？
- ⑥これは？…デパートというよりは、う～ん、まあ、デパート、ん？デパートとかの、その従業員とか、客というか、関係というよりは、ここの、こういう作者と同じ時代？の、人たちが、ま、スウェットとか、服装に気をつけていない家族を見たときに、ん～、なんでこんな恰好をしてくるんだろうと疑問に思うこと、だったり…でも、たぶん、ん～、最後の文章は、当てはまる人と当てはまらない人がいる、気がします。
- ⑦こ～れ～が～、他人の自由を奪う自由…もともとじゃないのかなあと思うけど～（笑）でも、ん～、その、他人の自由を奪う自由が…空間的な考え、う～ん、空間とか、思考？なのかなあ。
- ⑧ここの文章が一番意味がわからない。他人の自由を奪う自由は、えー、ま、スペースとか、ま、考えだとしても、それが普段着の精神性にとりつくとなると…あ～、あ～、そうか、普段着の精神性だから、普段着、服装を考えないことに、人の自由が…満喫するほうがいいだろうが満喫されるほうはたまったものではない、という考えに基づく自由か。服装の自由…う～ん…服装の自由が…な…普段着の精神性にとりついて傍若無人の自由として蹂躪するのである…うん…他人の自由…服装の自由が、普段着の精神性…なんか、どこで何を着てもいいという考えに、服装の自由がとりつくつと、TPO をわきまえないっていう傍若無人、うん、はい、ははは（笑）

H1の発話思考法の所要時間は6分12秒であった。まず1文目で「普段着の過信は前の段落に書いてある」と、前段落と関係付けながら理解しようとしている。「マイカーを持つようになってから、っていうのはここ最近である、ってことかな?」と述べており、「マイカー」を戦後の高度経済成長期を表象するアイテムとしてとらえず、最近のこととしてとらえている。また語尾が「～のことかな?」となっており、自らの解釈に対する自信の無さ、或いは自身に確認するような言い方になっている。この「～かな?」という文末表現は、このプロトコル全体を通して頻出しており、H1の話し方の特徴の一つとも、また読解プロセスにおける特徴の一つとも考えられる。3文目では、「これは電車とかの話でも通用するかな?」と言い、車から電車へと解釈を広げて話している。4文目では普段着をスウェットに置き換えて説明し、さらに車で東京都心に直入できるというコンテキストを「デパートとかに行くことなのかな?」と具体的なイメージを連想させて理解しようとしている。この「デパート」という具体的なイメージは6文目の解釈にも引き継がれ、ここではさらに「従業員と客」「スウェット」などの具体的な連想も持ち出して説明している。また「最後の文章は当てはまる人と当てはまらない人がいると思います」と、テキストに対する意見を述べ、7文目でも「他人の自由を奪う自由」という本文中のフレーズを繰り返した後で「もともとじゃないのかなあと思うけど」と、自分の意見を述べている。さらに「他人の自由を奪う自由」というフレーズをもう一度繰り返し、その「自由」について「空間」「思考」などの言葉を補いながら、解釈しようとしている。最後の8文目についてはまず「この文章が一番意味がわからない」と述べた上で、本文中のフレーズを繰り返したり、言葉を補いながら理解しようとしているが、最後は説明を完結させずに発話を終えている。

4-3-2 H2の事例

表10 H2のプロトコルデータ

- ②あ、だから、車の中で移動するようになったから、その、普段着ってというのが、普段着を着やすくなった。…普段着っていうのも、なんか、なんだろう、普段、うーん、そもそも普段着って余所行きじゃダメなのかな、って思うんですけど。
- ③サン … サンドル履き … なんか、今サンダル履きっていうと、なんか可愛いサンダルとか普通に、なんですかね、なんか、ヒールがついてたりついてなかったりのもあるんで、余所行きでもいいのかなって思うんですけど、サンダルって。でも、このとき、2003年ですよ。だから、なんだろうな、サンダルって、その、下駄?草履みたいな感じ、っていうイメージなんですかね。この人は。あんまポジティブなイメージではないかな、この文章。
- ④サンダル、イコール、なんかネガティブっていうイメージを表している感じですかね、この文。その他人の社会を踏む。だから、自分の家じゃないんだよ、みたいな。自分だけの空間じゃないんだよ。的なことを言ってる感じかな。恐ろしいっていうの、(笑) ちょっと大げさかなって思うんですけど (笑)。うん。あんま、なんていうん

ですか、なんか厳しさが無い、出かけることに対して。

⑤⑥ 満喫されるほう…自由？うーん…あんま同意できないですね、ここ（笑）。この人と。だって、自由、自由だから満喫できるんじゃないのかなって思うんですけど。人の自由って、ほかの他人の自由、関係ないんじゃないですか、って思っちゃいます。

⑧ たかが普段着のことで、これだけ考えるのってすごいと思うんですけど（笑）。なんか、私はあんま人の格好気にしないっていうか。ま、でも状況によりますけどね、なんか。なんか、深夜のコンビニとか行くと、別にだる着、なんていうんですか、その、普段着でもいいかなって思うんですけど。で、他の人を見ると、全然気にしてないんですけど、やっぱ、なんか、電車とか乗ってて、都心へ行くときは、ちょっと気になりますかね、なんか、あ、この人、この格好でいいんだ、とか。なんか、今は、状況と場所による感じですかね。人の格好って。はい。

H2の発話思考法の所要時間は5分43秒であった。2文目ですでに「そもそも普段着って余所行きじゃダメなのかなって思うんですけど」と少々批判的なトーンでテキストに反応している。3文目の「サンダル履き」については、「今サンダル履きっていうと」と言っていて、「可愛いサンダル」「ヒールがついていたり」など、現代のサンダルを具体的にイメージしようとしている。さらに、このテキストが2003年に書かれたものであることに着目して、現代の文脈に置き換えて読み進めようとしており、いわゆる「サンダル履き」という言葉が持つイメージとは結びつけていないと思われる。しかし、その後「あんまポジティブではないかな、この文章」と言い、4文目でも「サンダル、イコール、なんかネガティブ」と述べて筆者の主張のトーンを探るように読んでおり、大筋ではテキストの主旨に沿って読んでいる。そしてテキストの理解を進めながらも「恐ろしいって言うの、（笑）ちょっと大げさかなって思うんですけど」と、ここでまたテキストに対して少し批判的に反応している。5、6、8文目でも「うーん…あんま同意できないですね」、「たかが普段着のことで、これだけ考えるのってすごいと思うんですけど」のように批判的なトーンでテキストに反応を示している。8文目では「私はあまり人の格好気にしない」と自分の経験に引き寄せて、深夜のコンビニ、だる着など具体的な場面、服装に置き換えて話している。

4-3-3 H3の事例

表 11 H3のプロトコルデータ

① 普段着を、世の中の人々が、こういうちょっと楽しめた普段の服をよく着るようになって、だからほとんど、世の中の人（笑）今普段着で歩き回っているようなイメージ（笑）。で、ま、みんな車を持っているので、車持っているほうが、なんかパジャマとか（笑）、ちょっとした、なんかジョガーとか？そのまま部屋着で出ている人のイメージは、あります。車を持ってる。

- ②普段着… 普段着ってということばで想像したのは、なんか、ほんとに、ジーパン?と、なんか白ティーシャツ一枚、みたいな、そんな想像が今一瞬わいたんですけど、でも… なんだろ、最近だと、なんか、もう一回見直すと、今の時代ではなんか、あれ、なんていうの、ジョガーってなんていうんだらう、スエット?スエットのイメージのほうがわかる、スエットはいてる人のほうがよく、なんか普段着ってというイメージが、今はします。
- ③家に出たままそのまま (笑) 車に乗って、たとえば都会、東京みたいに、ちょっと派手なところにスエットとか (笑) パジャマみたいな服装で車で向かうイメージ… です。
- ④なんか、無造作ってという言葉が想像に入ったので、が、その、簡単に言えばこぎれいにしないまま、その都会っていうか社会、たくさんいる人のところに、なんか踏み入る感じ。そう、線が引いてあって、その、なんだろ、ちょっと、こぎたくないっていうか、無造作な人達が、その、きれいにしている人達の中に一歩足を入れたのがイメージする、感じですね。
- ⑦ (中略) なんか、イメージ的には、みんな自分の、ひとりひとは、みんな自分の、ある程度パーソナルスペースがあるっていうか、その、自分の、パーソナルスペースにある範囲、の中で、行動をとっていると思うんですけど、そこまでを、invade? していくようなイメージ? … ってとっているんですけど… なんだろ… でも自由はみんなあるから、奪うことはできないっていうか… 他人が気に食わないような行動をとることが、自由を奪うというのか…よく、わかんない、難しい。取り合えずなんか、人のスペースに、なんか、入る、イメージ
- ⑧まずこれ (傍若無人) が何かわからない。で、その、人のスペースに? 入る? というそのたぶん気付いていないうちに自分が人の場、スペースを invade しているっていうか、自分の範囲がわかりきれてない、人が、多分他人の自由をうばったりしている、と思うので、その、その精神? 自分がどこまで何をしていたのかっていうリミットがわからない、っていうその精神、が、最近の人? には多いのかなっていう、その、どこまでが合ってる、どこまでが正しくないのかっていう線引きが引けてない、人が今の時代は多いかな、とは思、んですけど、その「蹂躪」っていう漢字もわからない。でも「足」って入ってるから、イメージ的には「踏み入る」感じ。わかんないです。そんなイメージ。

H3の発話思考法の所要時間は10分8秒で被験者中最も長く、発話量が最も多かった。1文目の「マイカー」という語に対して「みんな車を持っているので」と解釈しており、いわゆる高度経済成長期の「マイカーを持つようになった」という時代背景には結びついていない。また「普段着」を「パジャマ」「ジョガー」と言った現代の日常で身近にある物に置き換えてイメージしながら理解しようとしている。2文目でも「ジーパン」「Tシャツ」「スエット」など現代の具体的な服装を想像しながら話しており、本文の文脈における「普段着」という話からは離れて、自分にとってわかりやすいコンテキストに置き換えて理解しようとしているようである。3文目の「自分の家の門前から、サンダル履きのまま東京都心へ直入出来る。」という文についても「家に出たままそのまま (笑) 車に乗って、たとえば都会、東京みたいに、ちょっと派手なところにスエットとか (笑) パジャマみたいな服装で車で向かうイメージ… です。」と述べており、自分にとってわかりやすい日常的で身近なコンテキストで置き換えて解釈している。4文目では「不

作法」を「無造作（むぞうさ）」と誤読しているが、「無造作という言葉が想像に入ったので」と言い、この言葉からイメージを発展させてテキストを理解しようとしている。ここでは「ちょっと、こぎたないっていうか、無造作な人達が、その、きれいにしている人達の中に一歩足を入れたのがイメージする、感じ」と述べており、具体的で日常的なイメージを描いている。7文目では、「パーソナルスペース」「invade」などのように、英語ではあるが、少し抽象度の高い表現を用いて説明している。ここで「よく、わかんない、難しい」と自己の理解度をモニターしているが、イメージを発展させながら、より正しい理解へと近づいているようである。8文目でも「傍若無人」がわからないと言いながらも、大体の理解にたどり着いている。「蹂躪」については「足」を含む漢字であることから「踏み入る感じ」と推測して読んでいる。

4-3-4 M1の事例

表 12 M1のプロトコル

<p>①「普段着の過信」っていうのは何か、思いすぎっていうのか、で、「たぶん」っていうことは、あまり自信がないのかなあ…「マイカーを持つようになってからのことだと思う」、マイカーが一つの原因</p> <p>⑥家族にとってはいいだろうが（本文の読み「される方はたまったものではない。）、家族以外の、他人、社会ってことか</p> <p>⑦「自由」、括弧つきだからたぶん重要で、他人の自由を奪う自由、他人の自由を奪う自由、っていう意味で、これが自由で、戦後の前はそうではなかった。戦後の後実践した自由はこれだけである。これまで変わってきてない</p> <p>⑧普段着の精神性…普段着の精神性…ここでいう不作法な普段着の精神性ってなんか、う～ん、普段着の精神性にとりついて、普段着っていうものの、性質に、他人の自由を奪う自由がくっついて、（本文の読み「傍若無人の自由として蹂躪するのである」）はい。</p>

*○数字は、原文に付けた○数字の文に対する発話である。

M1の発話思考法の所要時間は3分40秒で、被験者4人中最も短く、発話量が最も少なかった。まず1文目では「過信」を「思いすぎ」という言葉で置き換え、「たぶん」という言葉から「あまり自信がないのかなあ」と筆者の立場を理解しようとしている。さらに「マイカーを持つようになってからのことだと思う」を「マイカーが一つの原因」とまとめている。6文目の「満喫するほうはいいだろうが、されるほうはたまったものではない」については、満喫する側と満喫される側について、「家族」対「他人、社会」という構造で理解しようとしている。7文目では「自由」が括弧つきになっていることに着目して、これが重要であることに言及している。その後「他人の自由を奪う自由」というフレーズを2回読み直している。さらに「戦後日本人が実践した自由とはこれだけである。」の文について、「戦後」という言葉をとらえて、「戦後の前」「戦後の後」の

変化に着目している。8文目では、「普段着の精神性」というフレーズを4回繰り返し、「普段着ってものの、性質に、他人の自由を奪う自由がくっついて」と自分の言葉に置き換えて説明している。最後の「傍若無人の自由として蹂躪するのである」のフレーズについては、読んだだけで説明を加えずに、話を締めくくっている。

5 考察

以上、4名のプロトコルデータを中心に分析を試みた。非常に限られたデータであり、ここから決定的な結論を導き出すことはできないが、プロトコルから浮かび上がってきた読みの傾向、特徴をあらためて振り返り、考察したい。

まずH1の読みの特徴としては、本文には書かれていない「従業員と客」「スウェット」「電車」「デパート」など具体的なイメージを連想して理解しようとしている点が挙げられる。さらにテキストに対する意見も述べている。「文の読み直し」も全体のストラジーの25.9%と全体の4割以上を占めている。他に話し方の特徴として、「～かなあ」という表現、語尾上がりの表現、「そっか」と自身で納得しているような表現、「う～ん」というフィラーが多いこと、笑い声が多いことが挙げられる。これは、話し方の特徴であると同時に、読解プロセスにおいて自分で確認しながら読み進めていく一つのストラジーの特徴とも言えるかもしれない。笑いが多いことについては、フォローアップインタビューで聞いたところ、「自信がないところやよくわからないことをごまかすために、笑っているかもしれない」とのことだった。

H2のプロトコルの特徴は、テキストに対する反応、意見が多い点であり、それも全体的に批判的なトーンであった。フォローアップインタビューで、読解の際に「批判的読み」を意識して読むかと聞いたところ、「意識的にしているつもりはないが、高校でクリティカルシンキングの授業をとっていたので、無意識のうちにしているかもしれない」との回答であった。筆者の主張が「ネガティブ」か「ポジティブ」かを探りながら読んでいたのも特徴的であった。さらに「可愛いサンダル」「ヒールのついた」「下駄」「草履」「深夜のコンビニ」「だる着」「電車」など、自己の体験に基づく具体的・日常的なイメージを連想しながら読んでいたのも特徴である。

H3のプロトコルの特徴は、具体的なイメージを想像しながら読むことである。H3は被験者中発話思考法での発話量が最も多かった。H1、H2にも、具体的なイメージに置き換えながら読みの理解を進めていくプロセスが見られたが、H3はより具体的なイメージを利用してテキストを理解しようとしていた。被験者中最も未知の漢字語彙が多かったにもかかわらず、テキスト全体の大意を理解していたのは、このようなストラジーによって補っていたからではないかと思われる。音読時に読めなかった漢字が19字、意味がわからなかった語彙が7字と、被験者中最も多かったが、テキストの大意は理解できていた。わからないことを具体的なイメージで想像したり、語彙を類推することで補うことにより理解していることがうかがえた。「普段着」から「ジーパン」「白ティーシャツ」「ジョガー」「スウェット」、3文目では「パジャマ」などというように、日常の身近にある具体的な物をイメージしながら理解しようとしている。「イメージ」ということばを多用しているのもH3の特徴で、プロトコル全体では14回使用していた。フォ

ローアップインタビューでは、「読んだことを頭の中で絵や図でイメージしながら読む」とのことであった。また、「蹂躪」という言葉がわからないと言いながらも、「足」を含む漢字であることから「踏み入る感じ」と推測して読んでいる。

M1 は H1、2、3 に比べて、発話量が非常に少なかった。発話思考法というやり方に慣れていなかったということもあるかもしれないが、一方でこの発話量の少なさそのものが H1 の特徴とも考える。H1、2、3 と比べると、自己の体験を反映させたり、自己の意見を述べるのがほとんどなく、本文を言い換えたり、語を補ったりすることによって客観的にテキストを理解しようとする読みであった。フォローアップインタビューにおいても、読解に取り組む姿勢としては、「まずは自分の意見よりも、書き手が何を考え、何を言わんとしているかを正確に把握しようとする」と述べていた。また読み直しが多く、使用ストラテジー全体の 3 割以上になっているが、「読み直し」が多く見られたのは、テキストの文言そのものを咀嚼しようとする現れであったとも考えられる。Block(1986) は、読み直しは一般的に理解の欠如から来ていると考えられる一方で、内容について考える時間の反映でもあるとしている (p.473)。

少数の被験者から一般化することはできないが、本調査から浮かび上がってきた傾向を整理してみると、H1、2、3 は、3 人それぞれの違いはあるものの、自己の体験、想像力、イメージ、意見などで理解を補うストラテジーを用いて、自己の体験に結びつけて連想することでテキストを理解しようとしており、テキストに対する意見や反応も見られた。特に、「普段着」を「スエット」「だる着」「ジーパン」「T シャツ」など具体的なものに置き換えて話しているところが特徴的であった。しかし、「マイカー」のように高度経済成長期を表象するような表現を戦後とは結び付けておらず、身近なものとして理解しようとしている。7 文目の「ここでいう『自由』とは、他人の自由を奪う自由という意味で、戦後日本人が実践した自由とはこれだけである。」の文について、「戦後」という言葉を拾い上げて「戦前」と「戦後」に言及したのは M1 だけであった。このような時代背景と結びつける読みは M1 のみに見られた。H1、2、3 の中で、H3 は最も日本在住期間が長く、中 1 から日本在住である。このように中 1 から日本在住である学生は、海外在住の長い学生よりも日本の歴史や文化事情についての知識を持っていると思いがちであるが、実際にはそうではなかった。日本の歴史文化事情の知識の有無については、日本在住期間の長さだけでは測ることができず、家庭における言語的文化的環境、学習内容などとの関連から多角的に見る必要があるようだ。

第二言語学習者を対象とした先行研究との関連から考察してみよう。

森 (2000) は、母語話者と学習者の読みを比較して、母語話者の読みは、言葉や表現そのものに対する反応が見られる、テキストのスタイルに対するコメントが見られる、読解中に自己の個人的記憶を想起している、筆者に対する社会的・感情的次元が強く作用している、と観察している。H1、2、3 もまた、これらの読解ストラテジーを用いていたと思われる。ただし、「社会的次元」という点ではやや欠けているようであった。一方、日本語学習者の読みについては、狭い意味でのテキストの世界に限られていると森は観察しているが、この点については、H1、2、3 は、むしろテキストの世界を超えて読みを進めているようであった。この点から考えると H1、2、3 は、日本語学習者の読みよ

り母語話者に近い読みをしているようであるが、社会的次元の読みに欠けているという点で、母語話者との違いがあるようである。

Block (1986) の研究と関連付けてみると、H1、2、3の読みは、テキストから離れた個人的経験を利用し、reflexive mode を多用し、テキスト内の情報を統合しようとはしない nonintegrators のタイプにより近いようであった。一方 M1 は、extensive mode を使用し、テキスト内の情報を統合し、文構造を意識し、自分の読みをモニターする integrators の読みのタイプにより近い読み手のようだった。

館岡 (2005) は、すぐれた読み手は前後の情報や文脈を統合することにより解決しようとする「グローバルな自問」(p.78)を頻繁に行っていると指摘しているが、今回の調査では、M1 と H1 がこのストラテジーを使用していたが、H2、3 は使用していなかった。

6 今後の課題

本稿で示したデータは、母語話者1名と継承日本語話者3名という非常に限られたデータであり、ここから決定的な結論を導き出すことはできない。今後さらにデータを増やし、調査・分析方法の精度を高めることにより、継承日本語話者の読解の傾向・特徴を明らかにし、読解教材・教育方法の開発に結び付けていきたい。具体的には、以下のような課題が挙げられる。

まず、データを蓄積することが最大の課題である。具体的には20名以上が目標である。

また、調査対象者の背景と読解力との関係を見出すため、背景別に対象者を選定する必要がある。たとえば教育背景、家庭背景と読解との関係を観察することも必要であると考えられる。具体的には教育背景については、大学入学前にどこで教育を受けたか（海外現地校、海外インターナショナル校、国内インターナショナル校など）、日本語学習の背景、日本の学校で教育を受けた期間・年数などとの関連を観察したい。また家庭背景については、両親の言語的文化的背景はどのようなものか、家庭内言語は何かなど、もう一つの言語や文化との関係についても観察する必要があると思われる。

次に調査方法の見直しが必要である。本調査では発話思考法を用いたが、プロトコル分類項目について再検討する必要がある。今回被験者らが使用しなかったストラテジー項目については削除するという可能性も含めて、項目を精査したい。たとえば館岡 (2005) は読み手の既有知識の利用について、言語知識（文字、文法、語彙）、形式知識、内容知識と分類して観察しているが、このような観点からの分類も参考にしたい。また調査前の説明・練習なども十分に実施する必要がある。分析に関してもプロトコル中の被験者の沈黙をどう解釈するか、沈黙の際に調査者が先を促すように指示するのか、発話中の笑いやトーン（文末が疑問調に上がるなど）、フィラーをどのように示し、分析の材料としてどのような解釈するのか、などを慎重に検討した上で調査を実施する必要がある。さらに読解プロセスの観察と並行して、内容の理解度を把握するための調査も必要であろう。内容理解のためのテスト、要約を書かせるなどの方法を取り入れることも考えられる。また今回、第1回目調査とフォローアップインタビューの間が最長で1か月空いてしまったことも反省の一つである。被験者との日程調査についても十分準備配慮をし、調査を進めたい。

以上の課題と反省を踏まえて今後も調査を進めていきたい。

注

1. 本稿では、調査の対象者を「継承日本語話者」、また彼らを対象とした教育を「継承日本語教育」と呼ぶこととする。具体的には、両親または片親が日本人で家庭内で日本語を使うが基本的な生活言語は日本語ではなく、小学校・中学校・高校の教育のほとんどをまたは部分的に、日本以外の国或いは国内インターナショナルスクールで受けた者などである。
2. 「母語」「第一言語」などの定義・概念は定まっていないが、本稿では、大学入学までに海外居住が皆無か1年未満で、使用言語が日本語である者を「日本語母語話者」と呼ぶこととする。

参考文献

- 金山泰子・藤本恭子 (2017) 「第一言語／継承日本語話者である大学生のための日本語教育—2016-2017 特別日本語教育読解授業報告」『ICU 日本語教育研究』14, 45-53.
- 澁川晶・武田知子 (2017) 「日本語教育における適応支援—初年次教育としての役割からその先へ—」『ICU 日本語教育研究』14, 55-70.
- 館岡洋子 (2005) 『ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習—』東海大学出版
- 森雅子 (2000) 「母国語および外国語としての日本語テキストの読解—Think-aloud 法による3つのケース・スタディー—」『世界の日本語教育』10, 57-72.
- 和氣圭子 (2013) 「中上級日本語学習者の読解における困難点：think-aloud 法による事例研究」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』19, 101-115.
- Block, E. (1986) The Comprehension Strategies of Second Language Readers. *TESOL Quarterly*, 20, 463-494.

資料1 質問項目

1. 全体としてどのようなことを言っているか、まとめてください。
2. 筆者が言いたいことは、何ですか。
3. 10行目に「ぼくの父は必ず中折れ帽をかぶった」とありますが、「いつ」かぶったのですか。また「なぜ/なんのために」かぶったのですか。
4. ○行目に「放棄しているのである」とありますが、「何を」放棄しているのですか。
5. ○行目に「メリハリのつかない生活感が、メリハリのつかない社会観や人生観につながるのです」とあります。この文を、自分のことばでわかりやすく言い替えてください。
6. ○行目に「それを考えないで使い放題の自由は、伝統も国情も個性もすべて打ち砕き、何でもありも、何でもなしにしてしまったのである」とあります。この文を、自分のことばでわかりやすく言い替えてください。

資料2 テキスト

「普段着のファミリー」

あく ゆう
阿久 悠

「普段着のファミリー」というと、素朴で正直で、飾りつけのない、好ましい家族のようにうけとめられるかもしれないが、実は違う。僕がここで、表題にしまで書こうとしている「普段着のファミリー」とは、社会に対しての適応性や、他人に対する最低限必要な緊張感や、時と場合を全く心得ない家族のことである。

もちろん、余所行きと普段着という区別での、着衣の普段着のことも含まれている。そもそもは、ある時ふと、伊豆から東京への移動の途中で見かける人々のことを、いつから日本人は普段着で旅行するようになったのだろうと、疑問に思ったことから発している。

思い出してみしてほしい。かつては、家と社会という意識が厳然としてあって、家から一步出るとそこはもう社会であると思っていた。家の中では相当にダレた姿をしていますが、煙草を買いに出掛けるだけで社会用に、ジャケットの一枚も羽織ったものである。ぼくの父は必ず中折れ帽をかぶった。

家からほんの数メートル、同じ町内でもそうであったから、他町村へ出掛けたり、ましてや東京へ出るともなると晴れ着に近い物を選んで、最大の誠意を示し、同時に社会という他者の垣塙の中で緊張を持って過ごせるように、覚悟を決めたものである。

それは実に面倒なことであったが、これがよかった。社会には自分で押し通せないことがいっぱいあり、時には他者に自分を合わせることも必要だと、教えられたからである。また、人間というのは個々大した存在ではないけれど、社会を尊重し、味方に引き入れることで、つまり着替える毎に大きく見せることが出来るのだともわかった。それを今、多くのファミリーは得々として放棄しているのである。

普段着の過信は、たぶん、マイカーを持つようになってからのことだと思う。人々は普段着で移動するようになった。自分の家の門前から、サンダル履きのまま東京都心へ直入出来る。楽で、便利であろうが、不作法のまま家族が移動し、不作法のまま他人の社会を踏むかと思うと、実に空恐ろしい感じがするのである。ファミリーはしっかりと不作法の同志となり、自由を満喫する。満喫する方はいいだろうが、される方はたまったものではない。

ここでいう「自由」とは、他人の自由を奪う自由という意味で、戦後日本人が実践した自由とはこれだけである。他人の自由を奪う自由、これが普段着の精神性にとりついて、傍若無人の自由として蹂躪するのである。

たかが余所行きと普段着、着る物の選択で何ほどのことがあろうかと思われるかもしれないが、メリハリのつかない生活感が、メリハリのつかない社会観や人生観に繋がるのである。「個人」と「家族」と「社会」というたった三つの顔が出来ない人たちに、秩序や節度を期待することは無理であろう。個の過信が社会を崩す。そのメリハリを、どこで失い、どこで放棄し、どこで平気になってしまったのだろうか。

ファッションや行動に自由が持ち込まれて喝采を博したのは、ついこの前のことである。ぼくもその時は、大いに手を打ち鳴らした。しかし、この自由を使いこなすには、相当に練り上げられた社会人としての教養、場を心得ることの出来る品性と、それぞれが内面に抱いたタブーが必要であった。それを考えないで使い放題の自由は、伝統も国情も個性もすべて打ち砕き、何でもありの、何でもなしにしてしまったのである。(1377字)

[出典:阿久悠「普段着のファミリー」『文藝春秋』2003年12月臨時増刊号所収]

*実際の調査では縦書きのテキストを使用した。

